

京都・万寿寺所蔵涅槃変相図について

北九州市立自然史・歴史博物館 古谷優子

京都市東山区にある京城山万寿寺は、東福寺の塔頭でかつては京都五山の一であった。同寺に所蔵される涅槃変相図（以下、本図）は、涅槃の場面を中心に、その前後に起こる純陀供養、虚空上昇、金棺不動、金棺飛旋、金棺出現、迦葉接足、分舍利の計八場面をあらわした作例である。本図と同図様の涅槃変相図は現在確認できているだけで十数件にのぼり、この手の作品群がある程度受容されてきたことを物語る。本図はこれらの中でも最も古い作例の一で、鎌倉時代（13世紀）の作である。

本図を含むこれらの作品群については先学により、鎌倉初期に活躍した明恵（1173～1132）が建保3年（1215）に撰述した『涅槃講式』との関係が指摘されてきた。確かに本図にはこの講式と合致する箇所が見受けられるが、講式に記されない純陀供養、金棺出現の二場面を、どのように解釈するかは提示されてこなかった。

そこで、発表者は本図の画面構成に着目した。すると、本図の上部六場面については明恵の涅槃講式の順序通り、虚空上昇の場面を起点に円環構図をなすこと明らかとなった。また、樹木で上方と区切られた残りの場面が、涅槃講式にない純陀供養と金棺出現の場面であることにも気付かされた。このような構図を考えれば、上部六場面については、先学の指摘通り明恵の涅槃講式に基づく可能性が高まるが、依然として残りの二場面の解釈が問題として残る。この点については、平安中期の天台僧源信（942～1017）撰述の『涅槃講式』に、純陀の供養に倣い福德を得ることが涅槃会の趣旨とあることに加え、金棺出現に関する記述が見出せること、また、11世紀成立の『釈迦金棺出現図』に、金棺出現に加え、純陀供養の場面が描きこまれている点が注目されるだろう。

また、図様については、叡福寺所蔵の涅槃変相図（以下、叡福寺本）との部分的な近親性が伺われる。叡福寺本は、万寿寺に程近い泉涌寺に伝来した南宋時代の作例で、大般涅槃経後分に基づく図様であることが指摘されている。

つまり、本図は、大陸の涅槃変相図の図様を借用しながら、国内で流行した明恵の涅槃講式の内容を盛り込んだ作例とも考えられる。そして明恵の涅槃講式で理解できない下部の二場面については、明恵の涅槃講式成立以前の涅槃会の伝統が息づいている可能性もあるだろう。

さらに、本発表では、この涅槃変相図がどのような要求に基づいて成立したのか、明恵の涅槃講式の広がりや本図が所蔵される万寿寺の歴史、そして、その周辺の人々の動きを総合的に考えながら、私見を述べてみたい。